

NVC Monthly

同好会ニュース

寝屋川映像同好会会報

第16号(20100910)

発行 竹田幸男



9月例会の開催

9月例会は9月10日に開催、暑い暑い夏の最中の8月でも欠席者は1人しかなかったが、今回は3人。これは夏ばてではなく、各人の事情によるものでした。
(例会の窓参照)

例会の窓

平成22年9月例会

・日時：平成22年9月10日(金)

13:30～16:30

・場所：寝屋川市民活動センター 4階 こども室

- ・出席：天野 新井 石田 梶本 竹下 竹嶋 竹田 谷 (8名)
- ・欠席：小笠原 田口 田淵 (3名) / (50音順・敬称略)

例会次第

1. 各会員の最近の活動状況・情報交換
・天野さんが元気に参加されました。
2. 報告・連絡・協議事項

平野郷撮影会の件

- ・テーマ、狙い、撮影会実施日(曜日)などについて意見交換する。
街全体、一つの博物館を掘り下げ、賑わいの日、ゆっくりインタビューが出来る日、等々
 - ・松村会長から「刀の博物館」の砥ぎ場を案内してあげる、とされているのでそれに合わせる。
 - ・第4日曜日の博物館開館時がいいか、但し先方が忙しいか。
- 以上を含め次回、小笠原さんを囲んで検討することになった。

NVC Monthlyの記事筆者

- ・梶本さんが寄稿完了し8月号に掲載。
個人として反響が気になるとのこと。
- ・次回は名簿順で竹下さんの予定。

映像作品の著作権について

- ・NVC Monthly 8月号の記事について竹田会長から補足説明を受け、質疑を行なった。

著作権のある映像や音楽、写真や画像などを映像作品に使用することはあくまで個人として楽しむ範囲ならOK。公に出す場合は、例えば画面に出所を入れていたとしても不可、等

寝屋川市民文化祭出品の件

- ・竹下さん・新井さん・谷さんの計3作品が準備完了。
9月17日の締切までに竹下さんが代表手続きを行なう。
- ・映写会は11月3日の予定(日時詳細は次月紹介)

その他

- ・NVCを見られて差し入れをして頂いた由井さんに返礼と私たちの作品の一部を送らせて頂いた。その後、由井さんから竹田会長にお礼の電話を頂き、「映像の仲間と共に見せて頂く」とのお話があったとのこと。

- ・忘年会の予定

12月度の例会日に開催することになった。

- 12月10日(金)の設定で、場所、昼間または夜の開催か、等は次回検討。
(高槻の温泉に出掛ける案もあった)田淵氏に準備を依頼する。

- ・次回映像作品発表会の時期

今年3月に開催したので1年半後の2011年秋の開催を考える。

3. 作品映写

寝屋川市民文化祭への出品作品の映写

- ・「はす酒を楽しむ」(新井さん)
- ・「オーストリア アッヘン湖」(谷さん)

の2作品の映写・確認を行なった。

今回は会員からの新作紹介は、ありませんでした。

4. 会員の当面する問題点の質疑応答

天野さんから

・パソコンのMIC入力端子からの音声がうまく取り込めない事象について質疑。

・パソコンの画面の一部を自由に切り取ってメールで送ったりプリントアウトしたり出来るソフトの紹介。

谷さんから

・パソコンで印刷時の「用紙設定」が毎回「DVD」になっていて不便、という質疑。

4. 次回例会

- ・10月8日(金) 13:30～ 於：市民活動センター4階こども室
- ・ビデオカメラ当番：田淵さん。



私 - とビデオそして旅

竹下 功

私がビデオカメラを買ったのは定年退職の一ヶ月前ぐらい、つまり1988年の暮れぐらい、社員割引の会社製品購入の最後だったと思います。

1988年の春に会社の仲間4人ほどで台北研の小沢所長を励ましに行くなどと勝手な口実を作って旅行したことがありました。この時一行の一人がビデオカメラを持っていました。

当時はビデオカメラを持って台湾に入国するのは面倒で別室で書類を作り、出国の際にそのカメラを持っていないと出国できないと言う面倒くささでした。

しかしこの時、やはりこれからはビデオカメラの時代になるなあーと思いました。

ビデオカメラはいつ頃から市場に出てきたかを調べてみると、カメラとビデオデッキが別々の物は別にして一体型は1980年にビクターと日立が、1981年に松下が試作品を発表していますが市場に出たのは1985年の松下のNV-M1、ソニーのCCD-M8などで、松下は当時ニューコスビコンという撮像管を使

っていました。

私はどちらかというと新しい商品が出てもなかなか買わない方で、テレビを買ったのも昭和30年ぐらい、カラーに買い換えたのもかなり後でしたが、ビデオカメラは出て3年目ぐらいなら早かったほうです。

私は比較的長い旅行をするときは従来はポジフィルムを入れたカメラを持って行っていましたが、これは山登りは無理な母親にアルプスのお花畑を見せてあげようとか、海外旅行など当時まだ行きにくかった所を家族に見せてやろうと言った思いで撮影していました。

ビデオカメラはそう言った目的にはまた新たな手段が増えるので楽しみでした。

しかし私の買ったNV-M30は撮影素子はCCDになっていましたが重さは1.2kgもありました。これにカメラを持つと当時のEOS650はこれも1.2kg位あり、カメラを首に、ビデオを肩に担ぐと本当に首が回らない状態でした。

これに電池数個、充電器、テープ、当時のテープはVHS-Cで録画時間20分なので10本も持つと可成りのかさでした。

退職後最初の旅行はアメリカ行きで、ロスに友人がいましたので、3週間近く滞在し、イエローストン国立公園、ヨセミテ国立公園等へ行き撮影しました。

この時撮ったイエローストン国立公園の映像は先日の同公園のマンモスホットスプリングスの巻で昔話としてお見せしました。

あれが私の初めて撮ったビデオです。

余談ですがこの旅行でもう一つ大きな初めては右側通行の国、左ハンドルの車をドライブしたことでした。

この頃の私の撮影方針は、限られた長さのテープの中になるべく無駄なく撮影することで、後日編集すると言っても見苦しい画像を捨てる程度で、捨てる画像をミニマムにすることでした。

これは見せる対象が長いのを苦にする連中はいないので、限られた資材で成る可く沢山見せるようにと心がけていたからです。

この様な調子で翌1990年には英国16日間、1991年は北海道15日間と自分でプランを立てて車を主として移動手段とする旅行をし、ほぼ同じ程度にテープを消費し、つなぎあわせて2時間以内程度のVHSビデオを作っていました。

1992年はカナダに行く予定が流れて、1993年の秋になってポルトガルへ行きました。これが初めての旅行会社のパックツアーで10日間の旅行でした。

パックツアーは気楽ではありますが、何かとせわしなく、この時はビデオカメラのスイッチの切り忘れのようなミスが多かったように思います。やはりビデオ撮影には時間的拘束の少ない、と言っても夕方には目的地に着いていない

といけないのですが、自由な旅行が良いと思いました。

重たいビデオカメラに辟易していた私は、松下がどうしても8ミリビデオを出す気はなさそうだと読み、1993年の4月、ついにソニーのCCD-TR3を買いました。

当時は近くに今のような大型の家電量販店がなく、価格競争も激しくなかったので、ジャスコの売り出しで138,000円は安いと思って買ったことを憶えています。通販ではもう1万円ぐらい安いところもありましたが故障したときのことを考えて行きやすい店で買いました。今ではスーパーの家電製品売り場でこういう物を買うなどとは考えられません。

お陰で電池込み重量875gと半減とはいえませんが可成り軽く、嵩も低くそれにテープもCカセットに比べて半分ぐらいの容積で3倍の録画時間ですので、長い旅行でも3本持って行けば十分でした。

1994年はこのカメラを持って南ドイツからスイスへの旅行をしました。

これも余談ですが、ミュンヘンで借りたレンタカーは契約ではオペルでしたが、オペルが無くてベンツでした。スイスからイタリアの方へ下る山道でホイールキャップを落としましたが余分なお金は取られませんでした。

1995年は高崎でレンタカーを借り、まず尾瀬へ行き裏から日光に入り、東北道で猪苗代湖、裏磐梯等を見て那須高原に戻り会社の保養所に泊まり、宇都宮で車を返し帰阪しましたが、この時CCD-TR3が会津若松辺りで故障しました。

この会社の製品は故障が多いと聞いていましたが2年目の故障は予想外でした。

どんな故障かと言うと電源スイッチをオフにしてもオフにならないという故障で、電池がどんどん消耗するので異常に気づきました。対策としては移動中はこまめに電池を抜いておくことで、こうしておけば電池が消耗することはありません。電池さえあれば撮影機能には影響ないので、撮りたくても撮れないという情けないことには成らずにすみしました。

修理はジャスコの売り場まで持って行けば後はちゃんとしてくれたので近くで買って良かったと言うことになりました。

1996年は熟年ツアーというJTBの企画でトルコ12日の旅でした。私より、年配の方も何人が居られました。

この旅行で私はスチールカメラの方もEOS Kissに変えることで軽量化を図りました。結果EOS650の1.2kg 35 - 70ズーム付きがEOS Kissの860g 28 - 80ズーム付きとなり340g軽くなりました。これで肩や首がこるのが大分ましになりました。

この後1997年は安ツアーでロシア、チェコ、スロバキア、ハンガリー旅行

をしました。エルミタージュ美術館の中の撮影はビデオカメラはスチールカメラより大分高い金を取られました。ストロボ禁止なのでカメラは可成り好感度のフィルムを用意していない限りまともには撮れなかったと思います。

1998年はやはりツアーでシリア、ヨルダンへ元気な小山さんと一緒に出かけました。

この旅はかの有名なパルミラ遺跡とペトラ遺跡を見る旅でしたが、そしてビデオもカラースライドもしっかり撮りましたが、ペトラでビデオカメラのグリップベルトが切れました。

このベルトの効用は切れてみて分かりましたが非常に撮影し難くなり、やる気を無くしました。

このカメラは大きさ重量は勿論のこと画質などは前に使っていたものと比べ格段に良くなっているのですが、こういう簡単な部材に延べ日数にして2ヶ月ぐらいで切れるようなものが使われていることには感心できません。

さていよいよデジタルの時代に入ります。

家庭用のデジタルビデオのフォーマットは1993年、ソニー松下など国内8社とフィリップス、トムソンが加わった10社で協議会が作られ1994年にベースフォーマットが誕生し1995年から家庭用のデジタルビデオカメラが世に現れるようになりました。

私は例によって新しいものにいきなり飛びつかない質のものですから、1999年にやっとNV-DJ100を買いました。

このカメラの重量は800gで前のカメラより75g軽くなりました。

これを持ってこの年の秋イランへ行きました。そして此処で悲劇が起きました。買ったてのビデオカメラがいきなり故障したのです。

最初の1本はテヘラン、ケルマン、と回り三日目のヤズドの終わり頃に2本目に入れ替えましたが、その夜この2本目を再生してみると幾つものブロックが入り交じった全く使い物にならない画像でした。

再生回路が悪いのではないかと思い、先に撮った1本目を初めから再生してみますと、始めの10分弱は全く正常で、さすがデジタルと思わせるものでしたが、その後は2本目と同様使い物にならない画像でした。

この事から再生回路の問題ではなくそもそもテープにちゃんと書き込まれていないらしいと判断しました。

がっかりでした。一番の目当てのペルセポリスは翌日です。今更どうしようもありません。でも未練がありますので、ダメモトで翌日もカメラは回しましたが後で見るとやはり駄目でした。

それでその後はビデオカメラは荷物の下の方に入れて、もっぱらカラースライドに集中しました。

このビデオカメラは値段の都合で通販で買いましたので返品交換についてもめると心配しましたが、文句なしに新品交換してくれました。

このカメラは今も使っていますが問題は全くありません。しかしこの交換したカメラでイランで撮ったテープを再生してみましたがやはりだめでした。

ところがこの話には続きがあります。

実は今回のこの原稿を書くためにどの辺から映像がおかしくなったかを確かめるべく、久しぶりにまず1本目のテープを見てみましたが、写しそこねはいっぱいありますが、画面は殆ど正常でした。2本目は、始めの数秒間は使い物にならない画像ですが、その後は正常で、なんとペルセポリスが写っているではありませんか。

感激です。これならばパソコンに取り込んで何とかできそうだと思います。

ところがです。翌日同じ事をしてみると1本目は昨日同様ほぼ正常でしたが、肝心の2本目のペルセポリスは全く駄目でした。

どういう画像になるかと申しますと、画像はトラック数に対応する10本の横縞で構成されていますが、奇数番目は正常な画像のようですが、偶数番目は他のフレームの物のようで、しかしつながった画像のようでもなく静止画的な物です。

この様なエラーがどのようにして発生するのは専門の人はすぐ分かるのでしようが我々には想像もつきません。

しかし面白いことに何度かやっているとまともになることがあるのです。だからまだ期待は持てます。最悪でもアナログ画像を取り込んで安定的に見られるように出来るのではないかと思います。

話変わって撮ったビデオの後始末ですが、アナログ時代の編集はともかく見るに堪えない部分を切り捨ててつなぐと言う作業と、始めにタイトルを付け足すぐらいのことでした。

しかしデジタル映像はパソコンを使ってもっと色々な加工が出来ると言うことを誰に教わったか記憶にありませんが、やってみたいと思うようになっていました。

当時仕事として、私にとっては全く未知の画像圧縮の米国特許調査を少し前にさせられていまして、それに続いて家庭用デジタルビデオフォーマット関係の米国特許調査の注文があって悪戦苦闘していましたが、これは編集し易い構成が一つの特徴でしたから、それが頭のどこかに在ったのかも知れません。

誰か教えてくださる人はいないかと思っている時に松愛会の寝屋川支部の方から「ビデオ同好会のご案内」というのを戴きまして申し込みましたが、この会は成立しませんでした。たしか2000年の春だったと思います。

この年にはまたアメリカへ行きザイオン、ブライス、キャピタルリーフ、ア

ーチーズ、グランドキャニオン等国立公園を回りました。この中のアーチーズが第1回の発表会で見て頂いた作品の素材です。

2001年の3月には松愛会の寝屋川地区の活動を映像として記録し会員の皆様に見て戴くと言う企画が発足し映像作成協力委員の一人にして頂きました。

この作業が完了して2002年の7月から駅前の市立産業会館で今の映像同好会が発足しました。

この時点で編集ソフトやパソコンについて先輩に相談すれば良かったのですが、既に自力で動きかけていましたので我流でスタートしました。

当時私の使っていたパソコンは数年前に次男が「今やパソコン製作はレゴの時代だ」と言って簡単に作ってくれたもので、次にパソコンでビデオの編集をしたいから、もうちょっと高機能の物を作ってくれと言いますと、今度は「今やパソコンはオーダーメイドの時代だ」と言って、学校で使っている業者の名前を二、三挙げましたが聞いたこともない名前で首をかしげていると、じゃあエプソンダイレクトに聞いてみると言いましたのであたってみると此処にはシンフォムビーと言う編集ソフトがあることが分かりました。

そこで本屋で立ち読みして調べるとこのソフトは参照AVIと言うファイル構造を使っていると言うことが分かりました。この方式は通常のAVIファイルと違って大きなファイルが扱えると「新パソコンを使ったビデオ編集入門」という本に書いてありましたので良さそうに思えましたので、パソコンもソフトもエプソンダイレクトに任せる決心をしてこの年の暮れに発注しました。

このパソコンはMT-6000と言うものでハードディスクは20GB と50GB CPU 1.5GHzで編集ソフト付きで13万ぐらいしました。

このパソコンとソフトで編集をしてみるとマニュアルがわりあい詳しくできていて、細かいテクニックは別として字を入れたり音楽を付けたり簡単なランジションを使うなどはあまり難しくありませんでした。またサービスセンターに電話をかけるとわりにすぐ繋がりました。

ところが最後に編集した作品をテープに戻すのにつまずきました。

後から思えば笑い話ですが、マニュアルにはDV機器に録画するには機器をVTRモードにすると書いてありました。

この言葉になじみが無く私のカメラのマニュアルでは撮影と再生と言う言葉が使っていますので再生モードにしると書いてあれば間違いが起こらなかったのですが、先入観は恐ろしい物で、再生状態で書き込めるとは全く思ってもいませんでしたので当然のように撮影モードでパソコンの出力と繋いでいましたから全くテープに書き込むことが出来ませんでした。

おそらくソニーのカメラなどではVTRモードと書いてあるのでしょうか。電話での話し合いではこの出発点の誤りは全く話題にならず出来ない出来ないでつ

いにはパソコンをカメラ付きで送れと言うことになり、ちゃんと出来ますよと言って送り返されてきました。

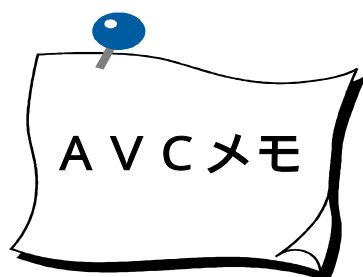
私が再生モードにするのだと気づいたのはその後すぐでした。

さて松下の映像同好会に入って分かったことは世の中カノーブスの編集ソフトが主流であってエプソンのソフトなどを使っている人はいないということでした。

後に私もカノーブスのDVStorm-RTのは入ったパソコンをパソコンごと人にもらってカノーブス派になりましたが、色々皆さんに教えてもらえるようになり随分助かりました。

ちなみにDVStorm-RTはやはり参照AVIと言うファイル構造を使っています。

この辺りから後のことは同好会で皆さんと一緒にしていることなので、話も長くなりますから、この辺りで筆を置かせて頂きます。



3 D ビデオカメラの出現

竹田 幸男

皆さん、人間には2つの目が付いています。人間に限らず、牛も、馬も、鶏も・・・毛虫までも2つの目が付いています。三つ目小僧という話がありますが、これは見たことがありません。1つ目の生物も聞いたことがありません。四つ目の犬と言われますが、後の2つは目ではなく、目のように見える模様です。ではなぜ2つ目なのでしょうか。

2つの目は物を立体的に見、そして物までの距離を測るために必要です。試しに片目をつぶって他人が差し出した物をつかもうとするとうまくいきません。2つの目がある間隔をおいて付いていることによって、それぞれの目から1つの物を見る角度が異なり、これを脳の中で判断して奥行きや立体感を知覚するのだそうです。動物が獲物を捕るために必要な機能が自然に備わった、と言うことが出来るでしょう。片目がつぶれた動物は餌を取ることができず、飢え死にするしかないでしょう。

静止画については、随分以前から3D製品がありました。動画についても以前から実験的な物がありました。あるとき、同じビデオカメラを2台並べて撮影している人を見掛けましたが、再生するのはどうするのか、聞き漏らしました。こういう機運の中、最近の映画「アバター」などの興業成功で一気にテレビに引火し、ついにPanasonicから家庭用ビデオカメラ「HDC-TM75

0 / 6 5 0」の2機種が発売されました。

この2機種のカメラに、アダプタの「VW - C L T 1」を装着して撮影するだけで、対応するテレビで視聴すれば（眼鏡が必要ですが）立体映像が見られるということです。3D撮影の方式は主な物だけでも10方式あると言われており、Panasonicの方式は「サイド・バイ・サイド」といわれ、左右の映像が1コマの映像の中に2枚入っており、従って記録解像度としてはフルHD(1,920×1,080ドット)だが、1コマに左右各1枚の絵が入っているため、フルHDの3D撮影はできない、ということで3D映像自体の解像度は横方向の解像度が半分の960×1080ドットになると思われます。

人間の2つの目の間隔は65～70mmといわれていて、この間隔が広いほど立体感が強くなるでしょう。名バッテリーは両目の間隔が広い、といわれたことがあります。VW - C L T 1の2つの光軸の間隔は12.4mmということで、人間の目よりもかなり狭い（虫よりは広い）のですが、この間隔でどのような技術で立体感が得られるのか、映像を見るのが楽しみです。これからも色々な新製品が現れると思いますが、3Dが私たちの作品作りにどのように関わってくるのか、これからの大きな課題として当面静観したいと思います。